

君の名は

—— 映画文学人生論

原作：菊田一夫 (1952年) NHKラジオドラマ
監督：大庭秀雄 (1954年) 脚本：柳井隆雄
出演：氏家真知子 岸恵子 撮影：斎藤毅
後宮春樹 佐田啓二 音楽：古関裕而
悠起枝 月丘夢路 浜口勝則 川喜多雄二
綾 淡島千景 加瀬田修造 笠智衆

忘却とは忘れ去ることなり 忘れ得ずして
忘却を誓う心の悲しさよ

東京大空襲を描いた文学の代表作として菊田一夫『君の名は』を読む。もともとはラジオドラマの脚本だ。ラジオで『君の名は』の番組が始まる時間になると、銭湯の女湯から人が消えたという伝説もつくられたという。

当時中学生の私はラジオドラマの視聴者ではなかったが、「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」という冒頭のナレーションはよく覚えている。

大庭秀雄監督、春樹役の佐田啓二と真知子役の岸恵子主演の映画も大ヒットした。日本映画全盛期の昭和二十九年の興行収入では『二十四の瞳』や『七人の侍』を押さえて第一位。

しかし、『君の名は』は今ではすっかり忘れ去られてしまったようだ。二十一世紀の若者は銭湯も知らず、「真知子巻き」と言う首から頭にかけてショールを巻く岸恵子のスタイルをも知らないだろう。映画でみると、白い、豪華なショールである。真知子はこのスタイルで男に逢いにわざわざ北海道に渡ったのだ。

まあ、そんなファッションは忘れてもいいが、東京大空襲は？ 災害文学としての『君の名は』を忘却してはいけないと思う。

いわゆる東京大空襲は昭和二十年三月十日のものが最大規模で、下町を中心に死者八万人以上、



君の名は ———— 映画文学人生論

焼失家屋二十二万戸以上の被害があった。それに続くのは同年五月二十四日の山の手空襲で、死者七千人以上、焼失家屋二十二万戸以上だった。この「映画文学人生論」でとりあげる作家のなかでは永井荷風や山田風太郎も被災している。

その日の夕方、春樹と真知子は数寄屋橋の上で死にさらされ、お互いの命を助け合った。独身男女のこんな運命的なめぐりあいは偶然とは思えない。思い出すたびに相手の人柄が美化され、お互いに忘れられない存在になった。

半年後の二十四日の夜、この橋の上で再会しようとして約束して別れたが、名前は聞きもらなかった。春樹は「君の名は」と聞いたが、真知子にはその声が聞こえなかった——これが二人の運命を翻弄したすれちがいのはじまりだ。

肝心の相手とはすれちがうが、他の人とは偶然の再会がやたらに多く、波瀾万丈の人間ドラマ。次はどうか、観客をやきもきさせる。作者が都合のいいように話をつくりすぎているが、メロドラマだから仕方がない。

二人の運命はもつれながら、佐渡、志摩、北海道の美幌、九州の雲仙、阿蘇と日本列島を転々とするが、最後は数寄屋橋に戻ってくる。映画のラストで「忘却とは忘れ去ることなり」と橋の袂でつぶやくのは影のヒロイン綾（淡島千景）だ。

忘却とは忘れることか冬シヨール